

カトリック 仙台教区報

2008年3月2日 No.180

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

人々の前で信仰の光を輝かそう

教皇ベネディクト十六世

教皇庁定期訪問中の日本司教団への講話

昨年12月15日(土)午前、バチカンの枢機卿会議の間で、教皇ベネディクト十六世は教皇庁定期訪問(アド・リミナ訪問)中の日本司教団と謁見を行いました。以下は謁見の中で教皇が述べたことばの全訳です(原文は英語)。

日本の教会への教皇様の示唆に富んだお話をカトリック中央協議会の承認をいただきここに紹介いたします。

兄弟である司教の皆様。

アド・リミナ訪問中の皆様をお迎えてきてうれしく思います。皆様は使徒ペトロとパウロの墓を崇敬するためにおいでくださったからです。皆様を代表してペトロ岡田武夫大司教様がしてくださったご丁寧なごあいさつに感謝します。わたしも皆様と、皆様が司牧するようゆだねられたすべての人々に心からのごあいさつと祈りをささげます。皆様は、ペトロが福音宣教の務めを果たし、自らの血を流してまでキリストをあかしした町に来られました。そして、この偉大なペトロの後継者を訪ねてこられました。このようにして皆様は、皆様の国の教会の使徒的基盤を強め、司教団に属する他のすべての人々と、きずなと、ローマ教皇とのきずなを目に見える形で示します(教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『神の民の牧者』8参照)。わたしはこの機会に、



最近亡くなった教皇庁移住・移動者司牧評議会名誉議長のステファノ・濱尾枢機卿様に対しあらためて哀悼の意を表します。そして、濱尾枢機卿様が長年にわたり教会に奉仕してくださったことに感謝したいと思います。濱尾枢機卿様はご自身の存在をもって、日本の教会と聖座

の交わりのきずなを示されました。濱尾枢機卿様が安らかに憩われましように。

昨年、教会は、日本の使徒、聖フランシスコ・ザビエルの生誕500年を大きな喜びの内に記念しました。わたしは皆様とともに、聖フランシスコ・ザビエルが皆様の国で宣教のわざを果たし、日本に初めて福音が

告げ知らされた時代にキリスト教信仰の種をまいたことを神に感謝

します。大胆に、勇気をもってキリストを宣べ伝えなければならぬことは、教会にとつて変わることはない優先課題です。実際それはキリストが教会に与えた荘厳な務めです。キリストは使徒たちにこう命じたからです。「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16・16)。現代の皆様の問題は、現代日本の文化的状況の中で、キリストの知らせを生き生きとしたしかなかったでもたらすための新しい方法を探ることです。キリスト信者が人口のわずかな割合を占めるにすぎないとはいえ、信仰は日本社会全体にかち与えなければならぬ宝です。この分野で皆様は、指導的立場にある者として、聖職者、修道者、カテキスタ、教師、家庭に対し、自分たちが抱いている希望について説明するよう促さなければなりません(一ペトロ3・15参照)。そのた

めには『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム綱要』の教えに基づく健全な信仰教育が必要です。人々の前で信仰の光を輝かそうではありませんか。それは、「人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの父をあがめるようになるため」(マタイ5・16)です。

実際、世界は、福音がもたらす希望の知らせを渴望しています。皆様の国のようなきわめて発展した国々においても、経済的な成功や技術の進歩だけでは人間の心を満たすことができないことに多くの人が気づいています。神を知らない人には「究極的な意味で希望がありません。すなわち、人生全体を支える偉大な希望がありません」(教皇ベネディクト十六世回勅『キリスト教的希望について』27)。人生には職業上の成功や利益を超えたものがあることを、人々に思い起こさせてください。家庭や社会の中で愛のわざを行うことを通じて、人々は「キリストの内に神との出会い」へと導かれます。「この神との出会いによって、愛が呼び覚まされ、心を開くことができるようになるからです」(教皇ベネディクト十六世回勅『神は愛』31)。日本のキリスト信者が同じ日本人に示すことのできるのは、この偉大な希望です。この希望は皆様の国と異質なものではありません。むしろそれは、皆様の愛する国で受け継がれてき

たあらゆるすばらしいもの、貴いものを強め、それらに新しい刺激を与えます。皆様の国の人々は、教会が教育や医療をはじめとした多くの分野で優れた貢献を示したことによつて、教会に対して正当な敬意を示しています。このことに基ついて、皆様には、人々と対話し、喜びをもつて人々にキリストについて告げる機会が与えられています。キリストは「すべての人を照らす光」(ヨハネ1・9)だからです。とくに若者は、現代の世俗文化の魅力にあざむかれる危険にさらされています。けれども、最初は多くのことを約束するかのように見えるあらゆる希望と同様、教皇ベネデクト十六世回勅「キリスト教的希望について」(30参照)、こうした魅力は偽りの希望だったことがわかります。そして悲しむべきことに、幻滅は、うつ状態や絶望、さらには自殺までも引き起こすことが少なくありません。若者の深いあこがれを満たすことができるのは神だけです。もし若者の力と熱意を神にかかわることから向けることができるなら、多くの若者が生涯をキリストにささげるよう力づけられるでしょう。そして、司祭、修道生活を通じてキリストに奉仕するといふ召命を感じる人も出てくることとでしょう。自分にこのような召

命があるかどうか考えるよう、若者たちを招いてください。恐れることなく、このような招きを行ってください。皆様の司祭や修道者にも、積極的に召命を促進するよう勧めてください。そして皆様の民が、「収穫のために働き手を送つてくださるよう」(マタイ9・38)主に祈り求めるよう導いてください。

日本における主の畑は、次第にさまざまな国籍の人々で構成されるようになりました。日本のカトリック信者の人口の半分以上を移住者が占めています。このことは、皆様の国の教会生活を豊かにし、神の民の真の意味での普遍性を体験するための機会を与えてくれます。すべての人が教会に受け入れられていると感じることができるような措置を講じることによつて、皆様は移住者もたらす多くのたまものを活用できます。同時に、普遍教会の典礼と秘跡に関する規定を注意深く守るよう、つねに心がけなければなりません。現代の日本は、広く世界と関わる道を中心から選択しました。全世界に広がるカトリック教会は、日本がこのように国際社会に向けていっそう開かれたものとなる歩みに価値ある貢献を行うことができます。

他の国々が日本から学べることもあります。それは、日本が古

来の文化の中で蓄積してきた知恵、また、とくに過去60年間、国際政治において日本がとつてきた立場を特徴づける、平和へのあかしです。皆様は、武力紛争が罪のない人々に多くの苦しみをもたらしている世界の中で、この平和へのあかしの変わることに重要な重要性について、ますます教会の声を示してこられました。わたしは、皆様が日本の国民生活における公共的なことがらに關して発言し続け、さまざまな声明の広報と宣伝に努めてくださるよう勧めます。それは、これらの声明が社会のあらゆるレベルで適切なしかたで知られるようになるためです。こうして福音のもたらす希望の知らせは、人々の心と心に真の意味で触れるようになります。そこから、人々は、未来への確信を強め、いのちへの愛と尊重を深め、皆様の国に住む外国人や滞在者に対してより開かれた心をもつことができるようになるのです。「希望を抱く人は生き方が変わります。希望を抱く人は新しいいのちのたまものを与えられます」(教皇ベネディクト十六世回勅「キリスト教的希望について」2)。

このことに関連して、これから行われる日本の188殉教者の列福は、日本の歴史においてキリスト教が力強く確かなあかしを行つたことをはつきりと示します。日本人は最初期から、キリストのために自らの血を流す用意ができていました。「キリストが触れた」これらの人々の希望を通じて、「闇の中で希望をもたずに生きていた他の人々にも希望が与えられました」(教皇ベネディクト十六世回勅「キリスト教的希望について」8)。わたしは皆様とともに、ペトロ岐部とその同志が雄弁なあかしを行うことができたことを神に感謝します。「彼らはその衣を小羊の血で洗つて清くし、今や昼も夜もその神殿で神に仕えているからです(黙示録7・14・15)。

全教会は、この待降節の中で、わたしたちの救い主の誕生を祝うことを心から待ち望んでいます。この準備の季節が、皆様と日本の教会全体にとつて、信仰と希望と愛を深める機会となることを祈ります。こうして平和の君が真の意味で皆様の心を住まいとすることができまますように。皆様と皆様の司祭、修道者、信徒の皆様を聖フランシスコ・ザビエルと日本の殉教者の取り次ぎにゆだねながら、主における喜びと平和の保証として、わたしの使徒的祝福を心から送ります。

(カトリック中央協議会
司教協議会秘書室研究企画訳)
(2007・12・16)

光と塩

教会の本質は信仰共同体であることです。ですから、パウロは、「キリストのからだ」であると教えてくれました。体には多くの肢体があるように、この共同体には、まさに十人十色の多様性があります。けれども、一つのからだの多くの肢体が、お互いしっかりと結び合わされているように、教会も多様性の一致を大切にしなければなりません(コリント12・12・27参照) ▼教会の多様性の一致を育てる源泉は、ミサにほかなりません。「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つのからだです。皆が一つのパンを分けて食べるからです」(コリント10・16・17)

▼もし、教会の中に、能力主義や力の論理を持ち込むと、たちまちライバル意識や、派閥や対立の構図が出来てしまいます。また、イエスが身をもって教えてくださった「仕え合う」という原則を、忠実に守ることが肝心です。

(博)



アド・リミナにて

司教 マルチノ 平賀 徹夫

昨年12月9日から17日まで、アド・リミナでローマに行ってきました。当然初めてのことで、私も大分緊張していたと思います。何をしたかと言えば、教皇様に拝謁して仙台教区のことをご報告し、祝福をいただくこと、教皇庁の諸省や評議会等を他の司教様方と共に訪問し、そこでも報告や話し合いをして交わりを確認すること、そして「アド・リミナ」という言葉が意味する使徒聖ペトロ・聖パウロの墓

参りと、司教団全員でミサを捧げること、という3点が主なことでした。

教皇様の個人謁見は12月15日(土)の正午からでした。時間は15分間。
教皇様の掌(たなごころ)は柔らかく温かかったです。テーブルの上には日本地図が開いてあり、「あなたの教区はどこですか」と問われて「ここからここまでです」とお答えし、「信者達は活発ですか?」との問いには、(見栄もあったでしょう)「はい、もちろんです」とお答えしたように思います。

本当を言うと、わたくしには個人謁見よりも12日(水)の一般謁見の方が強烈な印象として残っています。

水曜日は全くフリーだったので、10時半からの一般謁見に与りたいと思い、前日に注意事項を聞くなどして準備しました。当日10時ころ、教わったとおりの司教のスーツを着て広い謁見ホールに行くと特別な席に上げられました。教皇様のお席の横、5~6メートルの場所です。教皇様は随行の方と歩いて謁見場に入れましたが、世界中から集まった巡礼団から大きな拍手が起こりました。続いてその日の巡礼団がどの国のどの教区からであるか、英・仏・西・独・伊・ポーランド語で教皇様への紹介があり、紹介されたグループはそれぞれ歓声を挙げて拍手したり手を振ったり歌をうたったりしてアピールしていました。横顔からは(少し)お疲れのようだと思われましたが、教皇様はそのつど手を少し挙げて挨拶を返しておられました。そのとき思いました。80歳のこの方はこうして毎日毎日、毎週毎週、全世界のため、人類全体のための存在としてご自分のすべてを捧げておられる、まさに「アルテル・クリストゥス(もう一人のキリスト)」そのものだ、と。丸い地球上では瞬時の途切れもなくミサが捧げられています、その中で全世界と全教会のため、そして教皇様のために祈り続けるのは本当に大切に必要なことなのだと思います。

このように、家庭における信仰教育は、子どもの生活の場で行うことにその重要性があります。例えば、食前食後の祈りも、子どもが自分の言葉で毎回手作りの祈りをする事によって、祈りを生活にしっかりと組み込むことができます。また、家庭祭壇を設置するだけでなく、御絵や御像を部屋に飾ることなども、信仰を育てる大切な環境を整えます。



「若い世代に信仰を伝える」 家庭の信仰教育のすすめ(Ⅲ)

司教神学顧問 佐々木 博

「父母を敬え」

すでに、モーセの時代に与えられた大切な掟である十戒の中で、「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地で長く生きることができると、命じられています。この掟は、家庭内における親子関係を、まさに宗教的に捉えているのです。なぜなら、親は家族において神の代理

を務めるからです。従って、父母を敬うことは、神を敬うことなのです。ですから、父母を敬うことが、まさに家庭における信仰教育の原点なのであります。旧約聖書続編にあるシラ書(集会の書)でも、親子関係を神との関係で捉えている次のような箇所があります。「父を尊べば、いつの日か、子どもたちがお前を幸せにしてくれる。主は、必

ず祈りを聞き入れてくださる。…主に従う者は、母を安心させる。〔主を畏れる人は、父を尊び、〕僕が主人に仕えるように、両親に仕える。…主は、父親に対するお前の心遣いを忘れず、罪を取り消し、お前を更に高めてくださる。〔3・5・14〕。このように、子どもにとって両親は、神との接点であります。イエスが、この世を去って天の御父のもとへ過ぎ越されると

きに、最後の信仰教育を弟子たちのためになさいました。それが最後の晩餐です。まず、自らへりくだって弟子たちの足を洗うことによって信仰共同体の基本である仕え合うことの大切さを教えてくださいました。それから、最初のミサをささげられました。実は、すでに旧約時代から、食卓は信仰教育の大切な場でありました。例えば、ユダヤ教の三大祭りの一つである過越祭は、食卓で祝われておりま

した。「また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられた土地に入ったとき、この儀式を守らなければならぬ。また、あなたたちの子どもが、『この儀式にはどういう意味があるのか?』と尋ねるときは、こう答えなさい。『これは主の過越の(いけにえ)である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と」(出エジプト12・24・27)。食事をしながら、親が、神がイエスを通してなされた救いのわざの数々を、子どもに語って聞かせることによって、まさに生活に密着した信仰教育をほどこすことができるのではないのでしょうか。

2007年度教区活性化研修会終わる

仙台教区宣教司牧評議会主催の「第6回(2007年度)教区活性化のための研修会」は、各地で実施され、2月17日の宮城県(元寺小路教会)で全て終了した。

各会場の研修会は、「教会とはーわたしたちは共に何ができるか」と題した平賀司教の講話とグループに分かれての分かち



①聖書に親しみ、生活に生かしているか。
②共同体として信仰をどのように生かしているか。
③教会が地域に受け入れられるには何をすればよいか。の3点に絞って行な

殉教者に学ぶ①



元寺小路教会 延沢 恒夫

昨年6月1日教皇ベネディクト16世は、かねて教皇に申請していた「ペトロ岐部と187殉教者」の列福を承認した。この知らせを受けた日本カトリック司教協議会殉教者列福調査特別委員会から、列福の解説文書が発せられている。その中で今回の「列福が持つ今日の意味、その位置づけ」と題し次の様に述べられている。

「188人の殉教者は、単にキリスト教の教会内に留まらず、現代の日本にも、大きな意味を持つ生き方をした人び

とであると言えます。今回の列福は、このことが世界の教会によって認められたことを意味します。188殉教者は、人間の尊厳と信教の自由を、政治的な運動ではなく純粋に信仰者の立場から守るために、いのちを賭けた人びとです。自分の物質的な利益や楽しみのためではなく、崇高な理想と、人間の真の幸福のために勇気を持って突き進む先達の姿は、現代に生きる人びとに大きな希望を与えていると思えます」。

更には日本の教会の原点として、「日本のカトリック教会は、殉教者の血から生まれ、殉教者の血のうえに立てられた」といっても過言ではありません。殉教者のこころや生き方に対する深い共感なしに日本の教会のアイデンティティを理解することは困難でありましょう。188殉教者は、英雄や勝利者として行動したのではなく、ただ神との間に、きわめて密接な関係を築くことができた人びとです。だから自分たちの時代背景の中で殉教という実を結んだのです。殉教に通じる神との密接な関係を深めることは、時代を超えて教会に求められる基本的な生き方です」。



青森浪打教会では、2月3日

(日)、津軽地区の研修会が行なわれ、本町、浪打、弘前、五所川原、石黒の各教会から約50人が参加し写真。6グループに分かれて分かち合いが行なわれた。

各教会で聖書勉強会があるので、聖書には良く親しんでいる一人ひとりが生き生きとすることである。日常生活の中で、聖書のことばを時々思い出し、てやさしさ、親切などを実行す

ることによって影響を与えることができる。

「世の光、地の塩」のことばがあるが、塩は味を生かす。その塩になるよう努力することが大切である。小教区では一般の方々がいつでも教会に入れるように色々工夫されている。地域社会に受け入れられることは難しい面もあるが、現在世の中で起こっている生命に関わる問題、家族内での殺人事件などについてカトリックとしての考えをしっかりと持つ必要があるのではないかなど、和やかな雰囲気や時間が足りないくらい分かち合いがなされた。司教様の話の中の「聖なる者とは失敗しても立ち上がり神に近づく生き方である」ということばに勇気付けられた。



めて教会に来た人、洗礼を受けた新しい信者、障がいを持つている人、若者や子どもなどに対する共同体の姿勢や人間関係であった。共に支えあい、ゆるし合うことで生き生きとした共同体を作っていくことが大切。地域社会に対しても一人ひとりが喜びをもって生き生きと生活すること、受け入れられるようになる。温かい共同体、楽しい教会になるよう努力しよう、などの意見が出された。

司教日程 3・4月

- 3・1 ① 八戸聖ウルスラ学院
- 3 ② 人權を考える委員会
- 8 ③ 9 部務問題委員会委員長会
- 11 ④ 司教評議会・司祭団役員会
- 15 ⑤ 西仙台教会百周年
- 18 ⑥ 仙台白百合女子大
- 19 ⑦ 聖香油ミサ
- 20 ⑧ 主の晩餐
- 21 ⑨ 主の受難
- 22 ⑩ 聖土曜日
- 23 ⑪ 復活の主日
- 27 ⑫ 教区財政問題評議会
- 29 ⑬ 責任役員会
- 4・3 ⑭ 八戸聖ウルスラ学院
- 12 ⑮ 在俗マリア会集会(盛岡)
- 13 ⑯ 宮城県南(大河原教会)
- 28 ⑰ 教区司祭団月例会
- 29 ⑱ 学校長・理事長・管区長の集い

報告・弘前教会 砂田昭子

宮城県の研修会には、県内の14教会から約130名が参加、分かち合いは、11グループに分かれて行われた写真。特に話題になったのは、はじ

喜多方教会・千草幼稚園新築落成

1964年(昭和39年)に建てられ老朽化が進んでいた喜多方教会と喜多方カトリック千草幼稚園は、昨年12月に聖堂と園舎の新築建て替え工事を終えた。写真。

工事に先立って喜多方教会では、建物は手を入れればまだ使える、建築資金がないなどと建て替えるの是非を問う熱い議論が交わされた。しかし、教会委員会は長年使ってきた建物への愛着とは別に、近い将来に聖堂・司祭館を建て直さなければなら



ない時を迎えることや、喜多方教会が小教区の統廃合の対象になる可能性を考えて、園舎と一帯となる聖堂の建て替え、さらに建築資金の一部拠出を承認した。

7月半ばから始まった建て替え工事は12月20日に終わり、旧聖堂の雰囲気を引き継いだ新聖堂と新園舎の祝福式が行なわれた。その後、信徒の望みがかなって新聖堂での最初

のクリスマスミサを多くの人が参列してさざげられた。

幼稚園は、第一期工事が終わり、木造一部二階建ての建物が出来上がった。

木の香りあふれる園舎内は様々な工夫が凝らされ、中でも遊戯室の高い天井と広々とした空間が目立っている。工事は今年度中に駐車場整備も含めて終わる予定で、幼稚園では前に比べると庭も広く使え

「あなたは、わたしに従いなさい」

(ヨハネ21・22参照)

聖ドミニコ会 天使園修道院

竹元しのぶ



1969年、京都の高野教会で受洗時の代母

に聞くと「一生、神様のそばで共同生活を送り、イエス・キリストの福音を伝えていく」ことを教えられました。そのことを聞いて私は、「すごい。生涯、神様のおそばで生活できるなんて、私もそうになりたい」と思いました。

招きにくたえて



吉田様より、ドミニコ会の黙想会に参加することを勧められました。その折、初めてドミニコ会のシスター達に出会えて、何か特別なものを感じました。白い修道服の何人ものシスターが20人位の参加者といっしょに静かに祈り、楽しく歓談される姿に。シスター達は、何を指しておられるのかしらと不思議でした。黙想会の係りのシスター

いつしよに参加した仲良しの友人に、「どうしたらシスターになれるかしら」と相談すると、院長様に聞いてみればと勇気づけてくれました。「ワタシノヨウナモノデモ...シスター...ニナレマスカ?」とおそるおそるお伺いしたところ、「ハイ、神様に全ておゆだねしましょう」

とさわやかな笑顔でお答えいただきました。以来、ドミニコ会の共同体で、神様の憐れみと姉妹の憐れみに支えられ、受けたたまものを相互に認め合って生きる日々です。特にくじけそうな困難なときには実感します。

「あなた方の内に働いて、御心のままに望ませ、行なわせておられるのは神であるからです」(フィリピ2・13)と。祈り、学び、働いて、この3月、養護施設仙台天使園を定年退職させていただけましたこと、神様から、子ども達との生活の中でいただいた恵みに賛美と感謝をささげます。

るようになるかと喜んでいて。建物の完成を祝って、1月26日(土)に平賀徹夫司教、佐藤守也東北カトリック学園理事長、喜多方市長、工事関係者、教会や幼稚園に関わった懐かしい人たちが参列して、献堂記念ミサ、幼稚園落成式、祝賀会を執り行った。(板垣勤神父)

キリスト教一致祈禱集会

仙台キリスト教連合会主催による2008年第一回一致祈禱集会が、1月20日(日)、カトリック東仙台教会で行なわれた。

当日は、宗派を超えて諸教会から司祭、牧師、修道者、信徒ら80余名が参加。みことばの祭儀が行なわれた。司式は、仙台中央地区モデラートル氏家和仁神父、説教は同盟キリスト教団秋山善久牧師が担当されたり写真。

先の詩篇について解説。現代社会もシオン(乾燥地)の山々のように乾ききついている。魂の乾き、人々の渇きがある。こうした中で、キリストチャンとしての働き、役割が求められてくる。諸教会が交わりを深めていけば、やがて理解できるのではないか。

ひとつになることの難しさもある。「共に祈る」ということは簡単なことではない。小さな努力を重ねていくことが大事だと思ふ。

キリストチャン自身が共に一緒になれない痛みがあり、傷ついている人々もいる。こうした要素を抱えながら主にあるものとして、ひとつになつていく努力が求められているのではないかと話された。

東仙台教会では初めての祈禱会とあって、多数の信徒が参加。



若い信徒の一人は「初めて牧師さんや他教会の方々と親しく話しができ勉強になりました。機会があればこれからも参加してみたい」と感想を話していた。

詩篇(113篇)が読み上げられ、「共に住むことの祝福」と題して説教。現代社会は「共生」とともに生きるということ。大きなテーマとなっている。資源、格差社会、テロなど課題は多いが、行き詰まり、あきらめ感が問題を難しくしているのではないかと、話され、続いて

また、第二回の一致祈禱会は、1月27日(日)バプテスト連盟仙台教会で行なわれ、救世軍の五十嵐光男師が講師を務めた。(東仙台 佐々木忠雄)

司祭員助

2008年2月1日付
で平賀徹夫司教は、2
008年・仙台教区の司
祭人事異動について、次
の通り発表された。

①2008年2月1日付異動

敬称略(一)内は前任地

三沢教会および十和田教会主任

兼任
アンドレ・レヴェイエ
(三沢主任)

十和田教会主任を解き病氣療養
マルセル・ポリケン
(十和田主任)

②2008年度(異動の司祭の
み、2008年4月1日付)

教区本部
教区本部事務局長
小松 史朗
(本町、浪打主任)

青森県
八戸塩町教会、鮫教会、大湊教
会 主任兼任
氏家 和仁
(仙台中央地区モデラト
ル)

大湊教会助任兼任を加える
川崎 忠紀
(八戸塩町、鮫助任)

本町教会、浪打教会 主任兼任
首藤 正義
(八戸塩町、鮫主任)

八戸塩町教会、鮫教会 協力
土井 文雄
(大湊主任)

岩手県
大船渡教会主任
会津 隆司
(案館米川主任)

盛岡地区担当
ヴァレラ ミゲル
(グアダルペ会本部)

一関教会、千厩教会 協力
ユン ヨオク
(気仙沼主任)

宮城県
気仙沼教会主任
会津 隆司
(案館、米川主任)

石巻教会主任
土井 勝吾
(盛岡地区担当)

仙台中央地区担当
ウリベ ダヴィデ
(グアダルペ会本部・ロー
マ留学)

マルティネス ホアン
(宮城県南地区担当)

舟山 亨
(会津地区協力)

仙台中央地区協力
佐々木 博
(石巻主任)

築館教会、米川教会主任兼任
横島 健二
(大船渡主任)

サバティカルで教区外居住
デ・ラ・ロサ・マル
コ・アントニオ
(仙台中央地区担当)

聖週間の典礼
について
Q: 昨年、初めて
聖週間の典礼に
参加したのです
が、儀式の意味が
よくわかりませんでした。今年はず
やんと意味がわかって参加したい
と思いますので、教えてください。
A: 聖週間の典礼は、1年間の典礼
儀式の頂点です。意味がわかって参
加したいと思われのは、信者とし
て当然のことです。
イースターは、ご存じのように、
325年のニケア公会議で決定され
「春分の日後の最初の満月の次の
日曜日」に祝われますから、毎年同
じ日ではありません。今年は3月
23日に当たります。イースター前
の1週間を聖週間と呼んでいます
が、イエス・キリストが十字架の上
の死を通して、復活の栄光に入られた
「主の過越の神秘」を記念する1週
間です。
4世紀に、エルサレムに巡礼した
人の記録が残されていますが、当時
「聖週間」のことを、「大週間」と
呼んでいました。エルサレムはキリ
ストが受難を受け、亡くなられた聖
地として、そのゆかりの場所で聖な
る儀式を荘厳に行っていました。
このエルサレムでの典礼が、「聖
なる過越の3日間」として全世界で
祝われるようになりました。その中
心は、受難の主日(枝の主日)と聖
木曜日、聖金曜日、聖土曜日です。



受難の主日(枝の主日)―過越の
神秘を完成するためにエルサレム
に入城された主キリストを記念し、
ミサの前に枝の行列が行われます。
A年の今年、マタイ21・1・11
が朗読されます。
聖木曜日(主の晩餐の夕べのミ
サ)―最後の晩餐において、聖体の
秘跡を制定なさったことを記念し、
ミサがささげられます。この日には、
翌日の分の聖体も準備され、聖体拝
領、拝領祈願の後、聖体安置のため
に準備されたところに運ばれます。
祭壇布などが取り除かれます。
聖金曜日(主の受難)―主の受難
の祭儀は、「ことばの典礼」「十字
架の崇敬」「聖体拝領」の3部から
なっています。「ことばの典礼」の
後に「盛式共同祈願」が、荘厳に唱
えられます。
聖土曜日―主キリストの墓で、主
の受難と死をしのびます。そのため、
ミサはささげられません。
復活の聖なる徹夜祭―徹夜祭の
開祭には、「光の祭儀」が行われま
す。「ことばの典礼」では、天地創
造から、救いの歴史をたどり、旧約
聖書、新約聖書からの朗読がなされ
ます。そして、洗礼式が行われます。



新刊案内

『わかりやすいミサと聖体の本』
著者 白浜 満/発行 女子パウロ
会/定価 1000円+税
一昨年、青年たちが企画した「あつち
こつちミサ」は、全国18箇所別の
所で、同時に心をあわせて青年たちが一
緒にミサに参加するというものでした。
今でも、そのミサに参加した人が時々
言うことは、その時の感動です。まず、
青年たちが準備していたミサの冊子タ
イトルが「お家に帰ろう」でした。平賀
司教様のミサでしたが、「みなさん、み
なさんの家であるミサにお帰りなさ
い!」という呼びかけが始まったときに
は、感動が背筋をビビと走ったと言っ
たのです。そして、ミサの最後は「それでは
みなさん、それぞれの派遣される場所へ
『行ってらっしゃい!』」で締めくく
られていました。

本書を読んで、最初に感じたのはこの
「あつちこつちミサ」の感動でした。
現代日本の典礼学の第一人者である
著者が、「主を喜び祝うことこそ、あな
たたちの力の源である」というネヘミア
預言者の言葉に生かされ、「ミサに行
く」のではなく、「神の家族のミサに帰
ろう」という意識が大切なことだと、と
呼びかけておられます。
本書は、21世紀を生きていくうえで
ミサが私たちの「日々の生活の光であ
り、力」であることを私たちに再発見さ
せることを目指して、書かれています。
ミサを自分の生活の中心に置き、ミサ
を生きたいと願う信者のみなさんに必
携の書といえるでしょう。

各地から

宮城県 元寺小路教会 カテドラルに響く典礼聖歌

男声合唱による典礼聖歌コンサートが1月13日(日)元寺小路教会大聖堂において開催された。これは名古屋にある男声合唱団「東海メルクワイアー」を中心に全国から93名が参加して開催された「男声合唱のための仙台・高田典礼聖歌合宿」の成果発表として行われたもの。指揮は須賀敬一氏、オルガン伴奏は木島美紗子氏(大阪教区)。東海メルクワイアーは2003年にも元寺小路教会において美しい歌声を披露しており、彼らの活動によって、今や各地の男声合唱団が高田三郎作曲の典礼聖歌をレパートリーに取り入れるようになってきているとのこと。



「ちいさなひとびと」ほか2曲が歌われた。この後、18時のミサでは合唱団が聖歌奉仕を務め、平賀司教、エメ神父の司式によりミサが盛大に執り行われた。

深い祈りにつつまれた。高田氏が指揮者須賀氏のために作曲したとされる遺作「神のみわざがこの人に」では涙ぐむ人の姿も見られ、また、聖堂いっぱい響きわたる「行け地のはてまで」の歌声は、私たちに力強く勇気を持つて神のことばを述べ伝えよ!と励まし、迫ってくるような感動を与えた。演奏者が退場の後も会場は拍手が鳴り止まず、アンコールに応えて

「ちいさなひとびと」(園部英俊)

西仙台教会 森司教様招き黙想会

昨年12月9日(日)西仙台教会では、森一弘司教をお招きして待降節黙想会を開きました。西仙台教会単独としては、3回目、八木山教会との合同で青野木にて行

練習はわずか2日間、二度と同じメンバーで歌うことのない合唱団であるにもかかわらず「神を求めよ」に始まって「行け地のはてまで」までの8曲いづれも素晴らしい出来ばえで、会場と演奏者が一体となって



われたいものを加えると、通算4回目の黙想会でした。黙想会に先立つミサは、森司教の司式により行われました。ミサ中の第一講話では、荒れ野のようなこの世の中で、神に顔を向けて生きることの大切さが話されました。続く第2講話では、マタイ福音書の第1章第1節にキリストの長い系図が出てくる事の意味について、詳しく講話されました。午後の第3講話においては、エクレージア(ギリシャ語：呼びかけられた者たちの集まり)としての教会の意味についての講話がありました。終始、独特の優しい口調で、懇切丁寧な講話でした。元寺や一本杉、八木山などからも何人かの信者の方々が集まりました。中には森司教の黙想会には最初の第1回目から欠かさず参加されている他教会の方もおりました。森司教の人の柄に負うところが大きいのですが、あたたかく家庭的な黙想会でした。

当日のCDが必要なのは、上野(西仙台)か、Sr.楠瀬(元寺事務室)まで、ご連絡ください。CD

この中には中学一年生の息子もおりました。学校生活やら受験など何かと悩み多き時期に入った我が家の最初の子です。親としては社会の重圧を背景に、彼をあれやこれや教育しなければならぬのではと、ある種、強迫めいた観念に陥ることもありま

3枚1セット実費(¥200)にて、お分けいたします。(上野 隆)

福島県

白河教会

新年が明けて間もない、1月の27日に私たちの白河教会では、司教様をお招きして白河の殉教者の記念と、堅信式Ⅱ写真Ⅱが行われました。ミサに先立って殉教者の名前が記載されている額と記念の言葉の額を祝別していただき

この子が生まれた時には、元気でいてさえくれれば他に何も望まないと思えていたのに、欲深い親は子の成長に反してこのザマです。堅信を受けるに際しても、準備や覚悟はできているのかといった脅し文句を口にしていました。神からの一方的なやさしさのしるしである秘跡を前にしての失言であります。何か成そうとすれば、えてして罪の入り交じる救い難き人間への深く限らないやさしさを前にして、現象ばかり追いかけて汲々としている。これまた救い難き父親は頭を垂れるばかりです。



一月最後の日曜日、白河教会では平賀司教様司式のもと堅信式が挙げられました。小学生から成人まで総勢16名という壮観な受堅に、教区最南の地への大きなお恵みを感じました。救いがないようです。

子の堅信、親の回心

岡崎 光洋

世間の目ではなく、御父のこの子を見つめる眼差しに寄り添わなければ、親子共々この先

活動紹介

「ぶどうの木」

心の病を持つ当事者と家族の方々を中心に、複雑な人間関係でストレスを抱えている人たちが集まり、「心のモヤモヤ」、「病気のつらさ」、そんな気持ちを吐き出せる場所を提供したい、悩みを話し、肩の荷をおろす事によって自分を見つめなおす、そんな語らいの場を作ろうと、「ぶどうの木」の集会を始めた。

集会は、毎月第2水曜日、午後1時30分から4時まで、カトリック元寺小路教会を会場に開かれている。

私の気分転換

東仙台教会 京 早苗

朝、仕事に出かける前の、ほんのひと時、春夏秋冬、折々の季節を感じながら朝食を兼ねたコーヒータイムを過ごします。天気の良い日には、ガラス戸越しに澄んだ青空にふわふわ浮かぶ白い雲を眺めたり、何を思考するでもなく思いつくままに、現実のこと、ありもしないことなど取り留めもなく心に浮かんでくるこ

4〜5人が参加している。

それぞれに違う問題や、生きづらさを抱えている人たちが、神様から呼ばれたように集まり、自分の悩み、苦しみを話し合った。解決する方法があるわけでもなく、悩みを抱え、困りきった人たちが、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」(マタイ11・28)ということばを信じて集まっている。

心の病を持っている人にとつて「教会には居場所がない、きれいなことを言っている人たちばかりが多い」との声もある。

今の世は、悩みを抱えながら生きづらさを抱えている人であふれている。家族、学校、社会とをポーツとしながら受けとめます。習慣になつてい

この時間が無い一日の始まりは落ち着きません。人は、それぞれの年代によって時間の使い方が違いますが、今、私に与えられているこの時間は信仰生活を送る上にも深く関わっているのかも知れません。神が造られたすべての時に意味がある。この恵みを感謝しつつ、私の気分転換は続きます。



の中で、人間関係やいじめなど

様々な悩みを抱え、ひとりでは抱えきれずに引きこもったり、「うつ」になったり、自殺したり、犯罪に走ったりなどの社会問題を引き起こしている。自分の悩みを家族にも言えず、苦しんでいる人もいる。

心の中に押し込め、封印された思いを、泣きながら話すことで、気持ちに楽になり、いやされる事もあるはず。まずは話して重荷をおろし、誰にも言えなかった自分だけの苦しさを吐き出そう。

話し手と聞き手がそろい、繰り返し話し合うことで理解が深まり誤解も解け、ゆるし合い、光が見えてくる。

互いに気持ちを理解し、やさしさと信頼を糧に、時には憤り、泣き笑いする明るく温かい会にしていきたいと思っている。

心の病に限らず悩みを抱えている人はどうぞ話に来てください。

世話人 工藤 正子(元寺小路教会)・富澤伊勢雄(元寺小路教会)・佐藤多鶴子(北仙台教会)
連絡先 022・373・2706

青年会黙想会

20年・30年後に教会を担う青年信徒を育成することは、教会にとつて大切な課題のひとつで

す。交流や親睦だけでなく、霊

的指導者や仲間と共に祈り、パンを裂き、語り合うことを主な目的に、今年から青年会が再出発します。その第一歩として、司教様、青年担当の神父様のご指導のもと、これまで青年有志が行ってきた黙想会を、「青年会黙想会」とし、定期的に祈り、学び、ミサを捧げ、ミーティングを行う場として位置づけることになりました。

今年はじめの青年会黙想会は1月18日(金) 19日(土) ラサール修道院にて、教区青年担当の舟山神父様に講師・司式をお願いして、「主の祈り」をテーマに開催しました。学生が試験中、土日も仕事がある社会人もいる中で、のべ10名の青年が参加しました。

使徒たちが祈りを教えて下さい、とお願ひして、イエス様から直接いただいたこの「主の祈り」には、福音がすべて含まれている、との講話を聞き、それぞれが主の祈りを味わいながら黙想し、分かちあい、共にミサを捧げること、深く神様との



告知板

◇テゼの祈り◇
4月4日(金)午後7:00~8:30 松木町教会

◇第24回カトリック医療関連学生セミナー◇
2008年8月29日(金)、30日(土)、31日(日)の3日間(詳細は次号)
主催:日本カトリック医師会仙台支部
メインテーマ:「病める人との対話を学ぶ」
会場:仙台白百合女子大学・北杜学園

つながりを感じることが出来ました。
ミーティングでは、2月に鹿児島で開催される全国カトリック青年の集まり「ネットワークミーティング・青年連絡協議会」への参加についての打ち合わせを行いました。

今後は、3月7日(金)20時~8日(土)に氏家神父様の講話・司式、5月16日(金)20時~17日(土)に平賀司教様の講話・司式で、いずれも東仙台のラサール修道院にて開催します。
連絡先 070・5620・7018 御供(みとも)まで。